



巻頭特集

世界のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL) は、
ユニバーシティ・オブ・ロンドン (ロンドン大学) を構成するカレッジの一つ。

1826年に創立された歴史ある大学である。

一橋大学の開設者の一人である森有禮も、伊藤博文らに次いでUCLで学び、のちに日本の礎を築く原動力となった。

ノーベル賞受賞者を20人以上も輩出しており、最近の世界大学ランキングではトップ10を維持している。

対談相手のグラント学長は、「London's Global University」をキャッチフレーズに、積極的なグローバル化を推進してきた。

まさに対談のテーマである「世界競争力のある人材」を輩出しており、

山内学長はさまざまな角度から、興味深い事実を引き出した。

グローバルに考えグローバルに行動する人材により、 政府と民間が収斂^{しゅうれん}してよりよい社会を築き上げる

森有禮のUCL留学が 日本近代化の礎を築いた!?

山内 はじめにUCLの建学の理念について、お尋ねしたいと思います。

グラント 建学の理念は三つあります。まず、一つ目は、人種や宗教、財産の多寡にかかわらず何人にも開かれているということです。これは当時としてはかなり斬新な考え方でした。二つ目は、当時オックスフォード大学やケンブリッジ大学で教えていたような古典的な知識ばかりでなく、新しい知識を教えるということです。そのため、本学は地学、工学、多くの言語を教えた最初の大学になりました。1870年ごろには、日本語、グジャラド語、ヒンズー語、ペルシア語などのさまざまな言語も教えていました。三つ目は、学際的に教えるということです。学部の枠を超えて、豊かな知識を横断的に教えるということです。

山内 それらの理念は、現在のUCLにも引き継がれていると考えてよろしいのでしょうか。
グラント もちろんです。つねにその精神に立ち返って遂行していることとしています。最初にお話しした、あくまで能力をベースにして何人にも大学を開放するという方針は、現在ではすべての

大学で必要な原則だといえるでしょう。もう一つわが校が理念、歴史とともに誇りに思っているのは、1878年に男性と同じ条件で女性に入学を許可した最初の大学であるということです。

山内 1878年ですか。ずいぶん早い時期からですね。一橋大学では、第二次世界大戦後からです。ところで、一橋大学の前身、商法講習所の開設者である森有禮がUCLで学んだということは、非常に大きな意味があると私は考えています。UCLの建学の精神を、森は忠実に受けとめて、自分なりに解釈しながら日本に取り入れようとしたのではないのでしょうか。

グラント その事実は大変興味深いですね。1863年に日本の若者を受け入れた大学は、そう多くなかっただろうと思います。長州藩士がUCLに留学したという事実は興味深いですし、ウィリアムソン教授が家族の一員として自宅に受け入れたということも事実として重要な点だと思います。
山内 ウィリアムソン教授は化学の先生ですね。



ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL) 学長 マルコム・グラント氏

Malcolm Grant

英帝国勳爵士。ニュージーランド生まれ、ニュージーランドで学位取得、専門は環境・計画法。

ケンブリッジ大学副学長をはじめ、高等教育機関の要職を歴任。環境法律家で、英国ミドルテンブル法学院の評議員。

2003年よりユニバーシティ・カレッジ・ロンドン総長・学長に就任。

現在、イングランド高等教育財政会議、経済社会研究会及び香港大学補助金委員会委員、

ロンドンビジネススクール理事及びディッチリー財団理事。

また、英国首相より任命を受け英国ビジネス大使に就任、英国の研究型大学20校から成るラッセルグループの会長、

イングランド地方自治体委員会委員長、英国農業・環境バイオ技術委員会委員長及び大ロンドン庁の規格委員会委員長等を歴任。



日本では最近、化学分野でノーベル賞を取っている人が多くいますが、もとをただせば森有禮などが化学をはじめ重要な事柄をUCLで教えてもらったところに行き着くかもしれませんね(笑)。
グラント あまりにも好意的すぎる言葉だと思います(笑)。ただ、はるか昔にそうした礎ができたということは事実だといえます。
山内 大事なのは基礎ですからね。森有禮は非常に先駆的な人で、幕末当時から英語を重視していました。

リベラリズムとデモクラシーの関係をどうとらえるか

山内 一橋大学では創立以来、リベラリズムを重視しています。UCLの場合はデモクラティックな歴史を持っていることがよくわかりました。リベラリズムとデモクラシーとの関係をどうとらえているのでしょうか。

グラント 非常に難しい質問ですね。つねにイギリス政府が直面している問題でもあります。

山内 一橋大学のリベラリズムは、経済的リベラリズムといってもいいと思いますが……。

グラント 経済的リベラリズムについて必要だという人はいます。ただ、政府はどうしても市場規制の信奉者になりがちです。先の金融危機により規制重視の方向に振り子が

いつそう傾きつつあります。イギリスには、規制緩和により市場を繁栄させるべきだという主張と規制をせずに市場の破壊を招いてしまった過去10年の過ちを繰り返してはならないという主張があり、その対立があるのです。国民は、市場の働きや、特に銀行に対して、大変失望したと思います。しかし、選挙で選ばれた政府は市場の自由に委ねる傾向の強い政府だったのです。

山内 日本は明治以来国家が強くなり、経済を強くすることを国の重点政策にしてきました。一橋大学のリベラリズムは、そうした環境にあって市民の力で経済を強くしようとしてきた側面があります。

その経済的リベラリズムを核にして、さまざまな自由が広がってきました。その意味で、一橋大学は日本における市民社会の形成に貢献してきました。

グラント 一橋大学の果たしてきた社会的な役割は、興味深いですね。1945年以降、イギリスでは自由と規制との間でかなり激しく変動しています。戦後すぐに樹立されたイギリス政府はかなり社会的な色彩が強い政府でした。その逆に極端に走ったのが1979年からのサッチャー政権でした。経済的リベラリズムを標榜し、その世界観で政策を進め、イギリス国内のみならず国際的にもかなり影響を及ぼしました。それ以降、いろいろありましたが、ブレア政権になって再び経済的



一橋大学長 山内 進

Susumu Yamamauchi

1949年北海道小樽市生まれ。1972年一橋大学法学部卒業。1977年同大学院法学研究科博士課程修了。1987年博士(法学)取得。

成城大学法学部教授、一橋大学法学部教授、法学部長、理事等を歴任。

2004年、21世紀COEプログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」の拠点リーダーに就任。

2006年副学長(財務、社会連携担当)、2010年12月一橋大学長に就任。

専門は法制史、西洋中世法史、法文化史。『北の十字軍』(講談社)でサントリー学芸賞受賞。

その他『新ストア主義の国家哲学』(千倉書房)、『掠奪の法観念史』(東京大学出版会)、

『決闘裁判』(講談社)、『十字軍の思想』(筑摩書房)など著書多数。

リベラリズムがかなり強くなっています。

山内 プレア首相は労働党ですよ。

グラント ええ、でも彼は社会的な目的を達成するための手段としてのマーケットを信奉しているのです。

山内 リベラルとは矛盾するかもしれませんが、私も一橋大学のリベラリズムでは、社会的な福祉、公的な福祉を重要な枠組みとして考えています。

グラント それは理解できます。そうした考え方を納得している研究者が一群として一橋大学におられるというのはいすごいですね。

山内 いや、すべての学者がということではないです(笑)。私のとらえ方です。

イギリスとEUにおける 教育研究の新たな動き

山内 話は変わりますが、ヨーロッパではエラスムス計画*1という新しい教育の仕組みが動き出しています。それに対してはどのようにお考えですか。

グラント すばらしいことだと思っています。エラスムス計画によって、ヨーロッパでの学生の移動交流がかなり促進されました。しかし、これははじめの一步に過ぎず、これからは、二つのプロセスこそが、大変重要なものになります。一つ目は、研究分野におけるフレームワークの構築です。現在、EUには欧州研究協議が設立されており、ここを中心に欧州における各研究者や大学との間で研究プラットフォームを構築する試みが進められています。もう一つはポローニャ・ブ

ロセス*2。これは、EUよりも広い枠組みでこれまでの学位制度について共通の構造を設けようとしているもので、ある程度の成果が出ています。

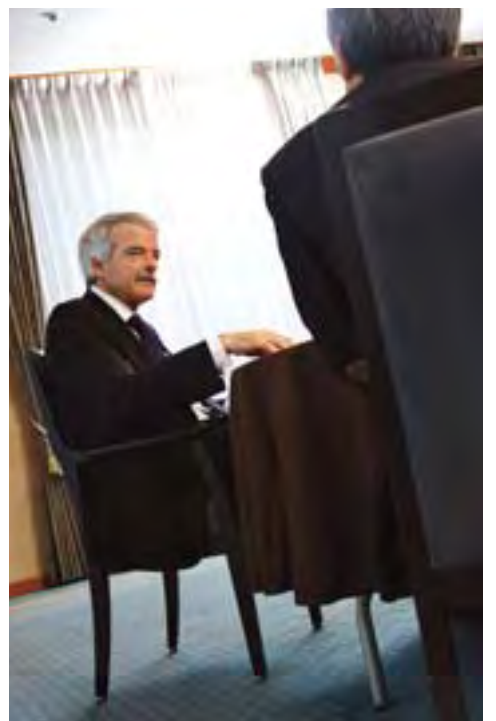
山内 イギリスの学生も欧州大陸の大学に行くのですか。

グラント ええ、でも大陸からイギリスに来る学生の方が多いです。UCLには、イギリス人以外の欧州人が約4000人学んでいます。UCLの学生で大陸の大学に行く場合は、3年次に1年間学ぶというスタイルがほとんどです。加えて、共同学位プログラムを結んでいますから、2年間UCLで学び、2年間は大陸の大学で学ぶという学生もいます。これにより二つの学位が取得できるため、法学部の学生が多いです。

山内 法律のシステムはイギリスと大陸ではずいぶん違うと思いますが、法学部の学生が大陸で学ぶ理由はあるのでしょうか。

グラント 大変重要な理由があります。共同学位プログラムに在籍する学生には、事前に、留學先の大陸法(シビル・ロー)について勉強させますので、まったく知らないということはありません。しかし、現地で学ぶことにより、大陸法と英米法、両方の法律の違いを学ぶことができます。また、重要な分野であるEU法を現地で学べるというのも大きな動機となっていると思います。

山内 一橋大学は慶應義塾大学と共同で欧州委員会から資金援助を得てEUについて教育研究をしています。



キャンパス国際化の 三つの手段

山内 EUが話題にのぼりましたので、EUとイギリスの関係についてお聞きしたいと思います。

グラント 非常に難しい関係にあるのは確かです。まず、イギリスが島国であるということ。そして、欧州とアメリカの間に位置しているということ。共通の言語、文化圏ということもあって、イギリスはアメリカと強い関係を持っています。これだけ強い関係を持っている国は、欧州ではアイルランドしかありません。アメリカとの関係が重要なのか、大陸との関係が重要なのかは、我々自身決めかねていることでもあります。また、通貨の面でもユーロ圏外であるということも影響があるかもしれません。なかにはEU自体から脱退すべきだと主張する人もいます。与党の保守党内部でもEU賛成派と反対派がいるような状況で

*1 エラスムス計画(The European Community Action Scheme for the Mobility of University Students: ERASMUS)は、各種の人材養成計画、科学・技術分野におけるEC(現在はEU)加盟国間の人物交流協力計画の一つであり、大学間交流協定等による共同教育プログラム(ICPs: Inter-University Co-operation Programmes)を積み重ねることによって、「ヨーロッパ大学間ネットワーク」(European University Network)を構築し、EU加盟国間の学生流動を高めようとする計画。(文部科学省HPより引用)

*2 2010年までに「ヨーロッパ高等教育圏」(European Higher Education Area)を建設することをめざして、欧州29か国の教育大臣によって署名されたポローニャ宣言(1999年)に基づく教育プロジェクト。現在は46か国が参加。



す。政府は問題を先送りできるなら先送りしたいと考えているようです。

山内 そうした難しい状況にあつて、学長はグローバル化を積極的に進めておられます。どういったお考えからですか。

グラント 大学の国際化の進みぐあいについては満足しています。我々は、これを大変重要な変化であると認識し、世の中の趨勢^{すうせい}から国際化はさらに進んでいくだろうと推測して、それに対応する手段を考えました。一つ目は、カリキュラムの国際化です。すべての科目や分野が、国際的に見て重要なものでなければならぬということですね。イギリスのみの狭い範囲でしか通用しないものは採用しません。その徹底には時間がかかりますが、順調に進みつつあります。二つ目は、学生



をグローバル市民として成長させてから、卒業させたいと考えています。つまり、世界中いかなる場所でも生活していける知的なツールと高いレベルの感受性を身につけさせているということですね。そのための取り組みの一環として、2012年以降、入学に際して新しい重要な要件を設ける予定です。それは、英語以外の近代的言語に一言語は習熟していなければならないということですね。三つ目は、学生も教授陣も世界中から集まってもらうということ。そして最後は、イギリス国外に小キャンパスを設けることです。たとえば、南オーストラリア・アデレードではエネルギー・天然資源の大学院を開設、また、この9月にはカタールに考古学の大学院を開設する予定です。ほかに、カザフスタンのアスタナに新設される大

学についての助言をカザフスタン政府に提供することも行っています。

グローバルな人材とは どんな人材か

グラント 大学は、グローバルな責任を負っていますから、積極的に国際化を進めていかななくてはなりません。ただ、そのプロセスは緩やかなペースでしか進みません。また、一度に多くの外国キャンパスを設けるつもりもありません。大学の国際化は、経済的な利益のためではなく、我々の学術的な進歩のために行っています。2009年には、エール大学との間で協定を結び、さまざまな分野で協力していくことになりました。大西



洋をはさんだ一つの大きな大学として活動していた方が、有意義であろうという判断からです。

山内 UCLのグローバル化がゆっくりしているように見えませんが……(笑)。学長のお考えになるグローバルな人材について、お聞かせください。

グラント 卒業生がグローバルに考え、グローバルに活動するのは大変重要なことです。なぜなら、多くの問題の根源は、ローカルにとどまらず、グローバルであり、そうした視点を求めています。また、グローバルに活動するにも、さまざまな方法があります。多国籍企業に就職し、各国の人材で構成されるチームで活躍する。国連やWHOといった国際機関で活躍する、国連のミレニアム開発目標^{*3}に対する十分な理解を持つ……さらには、気候変動、持続可能な都市づくりなど、そうした分野ではもともと聡明で、優秀な人材が必要であり、我々はそのような人材を育成すべきだと思います。

世界大学ランキングの順位より 自己評価の方が重要

山内 長い歴史があり、積極的にグローバル化を進めていることもあり、UCLは大学の世界ランキングでは上位にあります。このランキングというものは、日本の大学にとっては頭が痛いものでもあります。UCLのランクが高いにもかかわらず、学長はランキングには問題があるとおっしゃっていると聞いています。それは、どうしてですか。

グラント 根本的な欠陥があると思っています。



それは、一つ一つの大学が行っている内容がそれぞれ異なるにもかかわらず、あなたも「あちらよりこちらの大学の方が優れている」と比較可能であるかのように見えてしまいませんか。ランキング作成にかかわっている人々の主観的な考え方だけが順番を決めてしまうというところに欠陥があります。日本の大学にとって大きな問題であることは理解していますし、

世界の大学にとっても非常に大きな問題になっています。実際にランキング作成にかかわっている企業に聞くと、「最高のデータを収集し、それを使って結論を出している」と言います。しかし、なぜ彼らがそのように判断したのか、どのようにデータを使用的のかは開示されていないので、わかりません。いわば「こちらの大学の方がいい」と判断できるふりをしてはいるわけですが、そんな判断ができる人間がいるのでしょうか。

一方で、大学内部では、つねに自分の大学の教育研究をほかの大学と比較して、レベルをチェックしたり今後のあり方を検討したりすることが必要です。UCLでは、こう

した内部評価を続けています。また、アメリカの企業に依頼して、研究成果において、本学がアメリカ国内では、どのような位置づけになるかの評価をしてもらっています。こうした内部評価は、自分たちの現状を把握し、今後の改善をするために行っています。ランキングで上位であるという事実は享受してはいますが、それを判断材料に意思決定をすることはありません。

山内 しかし、どこの国の人もランキングが好きですから……。

グラント 東京大学はつねに上位のランクに位置していますが、それは規模が大きいということと自然科学が盛んであることが理由でしょう。自然科学はまた別の問題です。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスや一橋大学は、社会科学の教育機関であるために、ランキングの上位に置くことが難しくなっています。

山内 今の話は、紹介したいですね(笑)。ところで学長は、日本の大学ともさまざまなネットワークをお持ちですが、日本の大学の印象についてお聞かせください。

グラント ランキングの問題同様に、大学をひとくりにして語るのには難しいことです。私立大学にも国立大学にも質の高い大学があります。2004年度に国立大学が法人化という改革を進められたのは、非常によかったと思います。それにより大学の自立性が大きく促進されたと感じるからです。似たような改革を行ったことで、英米の大学は成功を取っています。一方で欧州大陸の大学は非常に厳格な政府の管理下にあり、それぞれの大学の学長が独自の決定を下したり、リスクを負って新たな試みを行ったりすることが難しい状

*3 2000年9月にニューヨークで開催された国連ミレニアム・サミットで採択された国連ミレニアム宣言を基にまとめられた開発分野における国際社会共通の目標。

況にあります。日本には、自然科学、医学、社会科学において、非常に優秀な大学があり、そうした大学から多くの研究者がイギリスの大学を訪れています。

優秀な学生には リベラルアーツプログラムを 実施する

山内 一橋大学の学生は、主として社会科学を学んでいます。そうした学生に学長から何かご助言をお願いします。

グラント 難しい質問ですね。UCLでは、学問の範囲を広げ、より学際的にしていこうとしています。ただ、学部レベルでは、それぞれの専攻分野の包括的な基礎づくりを行わなければなりません。現在、最も優秀な学生たちを対象に、新しいリベラルアーツプログラムづくりを進めています、人文科学、社会科学、自然科学を履修させようとしています。これはアメリカ的なモデルで、イギリスでは珍しく、厳密な方法でこのモデルを導入するのはUCLが最初になります。

また、法律や経済学を専攻する学生は、将来専門職に就く可能性が高い人たちです。そうした立場では、非常に大きな責任がつかまっています。こ

のような学生には、自分たちの社会的影響力について、強い使命感を持ってもらいたいと思います。個人的な利益ばかりでなく公的な利益についても理解してもらうことが重要です。政府と民間が乖離して努力をしていくのではなく、収斂しゅうれんして努力していくことが求められています。

山内 最後に、大学は国からの補助金で運営さ

れています。愛国心とグローバル化との関係はどうとらえていますか。

グラント 欧州では400年も前から、国家、愛国心という感情から、敵対的な関係が生まれ戦争に繋がったという歴史があります。EUは国家という概念を壊そうということで活動を続けてきました。その中で、各国の言語と伝統と慣行を残そうと試みているわけです。しかし、地域的な統治やグローバルガバナンスを十分に理解するには至っていません。もっと明確で一貫性のあるグローバルガバナンスへの理論構築が必要になるでしょう。例えば、2009年にコペンハーゲンで開催された第15回気候変動枠組条約締結会議におけるグローバル・コミュニティは、脆弱なもので、国対グローバルという緊張関係には深い溝があることが露呈しました。そこを踏まえて理論構築を試みる必要があるでしょう。

山内 本学の開設者が学んだ世界有数の大学であるUCLとの協力関係をいっそう発展させていきたいと思っています。本日は、佐野書院でのご講演も含めて、さまざまな興味深いお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。



2011年4月1日(金)、一橋大学佐野書院にて、マルコム・グラント学長の講演会が開催されました。「UCL and Japan」を演題に貴重なお話を聞くことができ、盛況のうちに終了いたしました。